－所蔵作品紹介－

最上　壽之　MOGAMI Hisayuki
ダンダンダ

作品データはこちら

最上壽之は、神奈川県横須賀市生まれで、東京芸術大学彫刻科を卒業後、角材を組み合わせた斬新な作品をモダンアート展に発表して注目を集め、1962年には26歳で同展の会員となった。当時から「彫刻の新世代展」（1963年、東京国立近代美術館）などの展覧会で紹介され、1970年にモダンアート展を退会後も、第４回平櫛田中賞を受賞（1975）するなど、活躍を続けている。

この作品は作者が25歳の時に制作した初期の代表作の一つである。角材の単純な繰り返しによる急勾配の階段状の作品で、彼が初期から非常に斬新な造形感覚を持っていたことがわかる。木という自然の素材と作者の造形の関係は親密に見えながら、彫痕などの直接的な行為のあとはないので、自然と人工が適度にバランスを保っている。無意味で単純な語呂合わせのようなタイトルからも、作者のウィットが伝わってくる。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より